

はしがき

「高校生にとって、『社会』は、自分の周りの半径5メートルですからね」

2年ほど前、京都産業大学附属高校の先生とお話している中で、高校の先生がぼつりつつぶやいたこの一言が、本書の出発点です。

それは私(吉永)が京都産業大学法学部の教員となって10年が経つ頃のこと。高校3年生を対象にした高大接続授業を担当することとなり、法学部での学びをどのようにしたらわかりやすく高校生に伝えられるかということを相談している中での一言でした。

この一言は、単に高大接続授業の内容を考える際のヒントになっただけではありません。当時、京都産業大学法学部では、カリキュラム改革が議論されていました。私は、1年生春学期開講科目「法律学入門」の担当者として、「どのようにすれば、法学部新入生が難解な法律学をスムーズに学び始めることができるか」ということを考えていました。前述の一言は、「法律をわかりやすく教える」ということばかりを考えていた私に、2つの点で反省を迫るものでした。1つは、法律についての説明の前に、法律が機能する場である「社会」についてイメージを広げてもらうところから授業を組み立てなければならないということ。もう1つは、「何を教えるべきか」ではなく、学生・生徒の目に今見えている風景こそが(たとえそれが間違ったイメージ、未熟なイメージであったとしても)教える際の出発点になるべきだということでした。

本書を執筆するにあたっては、法学部新入生が一体どのようなところでつまづいているのかを徹底的に分析するところから作業を始めました。これまでの授業の中で、「学生に伝わっていないな」と感じたのはどのような場面であったか、私自身の経験を振り返るとともに、同僚たちとも意見交換を重ねました。そうして、「つまずきの石」を数十項目にわたって抽出しました。

その分析に基づいて、大学の同僚である中村邦義准教授と二本柳高信准教授(2015年4月から専修大学)の2人が執筆に協力してくれることとなりました。ま

ずは3人で全体を大まかに三分して仮稿を作成し、それを踏まえて議論を重ね、その成果を踏まえてそれぞれが確定稿を提出しました。さらにその後、編者として私が最終的な文言を確定しましたが、その過程では単に表現を整えたというにとどまらない修正を加えた部分も少なくありません。これは、専門的な正確さを思い切って犠牲にしてでも（これは専門家としてはまさに断腸の思いでした）、読みやすさ（学生にとってイメージしやすい表現になっていること）を優先すべきという編集方針を徹底したからです。こうした経緯もあって、本書では章ごとの執筆分担を明らかにしていません。

法学部新生を対象にした書籍は数多くある中、屋上屋を架すように本書を刊行することにはためらいもありましたが、学生の「つまずきの石」を出発点にした点で、本書にも存在価値があるのではないかと考えています。もっとも、本書が目指した理想が達成されているのかどうかは、読者の評価をまたなければなりません。また正確さとわかりやすさのバランスの取り方が成功しているかどうかについても、読者の忌憚のないご批評に委ねたいと思います。

本書は、京都産業大学法学部の新生対象の科目「法律学入門」のテキストとして執筆されたものであり、主たる読者として法学部新生を想定しています。しかし同時に、法学部を進路の一つとして考えている高校生にも読んでもらい、進路選択の一助にでももらえればと思っています。さらに、高校生・大学生の周りにあって彼ら・彼女らを支えている保護者や先生方にもお読みいただいて、「法学部」についてのイメージをより広げていただければと願っています。法学部人気の低迷が叫ばれる昨今ですが、社会における価値観が多様化する中、紛争解決のための学問である法学の重要性はむしろ高まっていると私たちは信じています。

本書は、これまでの編者・著者の教育経験から生み出されたものです。これまで私たちの授業を受けてきてくれた多くの学生たちに、この場を借りてお礼を申し上げたいと思います。また本書執筆の過程で相談に乗ってくれた京都産業大学の同僚たちにも感謝をいたします。

さらに法律文化社の小西英央さん、野田三納子さんには、本書を企画する段階から大変お世話になりました。お二人には、本書のコンセプトに心からの共

はしがき

感を示して編者・著者を励ましてくださっただけでなく、仮稿の段階から最終稿にいたるまで本書を何度となく通読し、的確な助言を数多くいただきました。厚くお礼を申し上げます。

2015年1月

吉永一行